

「ミレトスでの別れ」

2016年08月18日

使徒言行録 20 章 33 節～38 節。「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。

パウロはエフェソ教会の長老たちを呼び寄せ、別れの説教をした。その最後を下記のように語っている。私は他人の金銀や衣服をむさぼったことはない。私はこの手で、自分自身と共にいた人々のために働いてきた。それは、自分で働いて弱い人々を助けることを諭すためであった。パウロは宣教の前線にあるところからは謝儀を貰わず、自活して生活を支えていた。このことが、コリント教会では謝儀を貰えない二流、三流の宣教者であると非難された。しかし、神の言葉が捻じ曲げられないように、自活することがパウロの自負と誇りであった。そして「主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました」と語っている。福音書には、主イエスが「受けるよりは与える方が幸いである」と語ったという言葉はない。ルカ福音書 7 章 38 節に「与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる」という、近い意味の言葉はあるので、十字架で命をも与えた主イエスの言葉として受け止められる。パウロは、この言葉に従って、与え続ける生活を身をもって示してきたと説教を締めくくっている。そして、皆と一緒にひざまずいて祈った。集まった人々は「自分の顔をもう二度と見ることはあるまい」と言ったので、別れを悲しみ、激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。死を賭してエルサレムに旅立つパウロと再会することはない思いながら送り出すエフェソ教会の長老たちとのミレトスで別れは哀切極まりない。パウロは人々に見送られ、乗船した。

教会員でツアーを組み、「パウロに学ぶ トルコ、ギリシアの旅」に行った時、私はトロアスとミレトスをどうしても訪ねたかったので、旅行社に案内を依頼した。ニカ所ともトルコにある。トルコはイスラム教国であるから、キリスト教の遺跡は残していない。トロアスは、パウロが幻で「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と懇願され、初めてヨーロッパに渡った記念すべき港である。今は何もない殺風景な海岸であった。しかし、パウロはここからヨーロッパに向かったのかと、深く印象に残った。もう一つのミレトスでは、私はパウロになり切って、一世一代の説教をしようと思っていたが、ガイドが使徒言行録 20 章を淡々と読み、説明してくれた。私は出番を失ってしまった。そこで、讚美歌 21-518 番「主にありてぞ われは生くる、われ主に、主われに ありてやすし／主にありてぞ 死を迎えん、主にある死こそは いのちなれば」を一緒に歌った。そして、祈った。涙が出た。皆も、パウロの死をかけた旅立ちの心境を思い、泣いた。ある方は「ここに来たから、旅はもう終わってもいい」と感激を込めて言われた。心に深く残ったミレトス訪問であった。